編集後記

やはりこの話から始めたい。

2019年10月31日午前2時34分、首里城正殿の火災報知機が作動し、火災発生が確認され、その後、瞬く間に燃え広がった炎に包まれて、首里城は焼失した。

周知のとおり、首里城は2000年に世界文化遺産「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」に登録されており、2018年12月には玉陵が国宝に指定されたこともあって、沖縄を訪れる方々が首里城とあわせて沖縄の歴史と文化に思いを馳せてくれたらと思っていた。それからわずか一年にも満たないうちに「首里城消失」という悲報に接し、あまりのことに、筆者自身、残念でならないし、沖縄の皆さんの気持ちを考えると、何と書いていいか言葉が見つからない。

本学生涯学習講座「知りたいっちゃ沖縄　行きたいっちゃ沖縄」では、講座終了後、毎年12月中下旬に受講生たちとともに沖縄研修旅行を行っているが、その一環で首里城には何度となく訪れた。とりわけ、沖縄ビギナーの方にとっては「まず訪ねたいのは首里城」ということで、僭越ながら案内させていただいたこともある。

ノンフィクション作家の与那原恵の『首里城への坂道　鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』には、大正末期に取り壊されそうになった首里城を、鎌倉が、当時、東京大学教授であった伊東忠太の協力を得て、間一髪のところで取り壊しから救う場面が描かれている。首里城は沖縄の日本復帰20周年の復元事業で蘇ったのであるが、そのときに鎌倉の残した『琉球芸術調査』史料が大いに役だったという。与那原は、琉球文化は、たとえ歴史の流れから断ち切られたとしても、あたらしい時代の人たちに思いがあれば、ふたたび息を吹き返すとし、その例として首里城を挙げた。

首里城再建に向けた今後の歩みが困難であることは容易に想像できる。しかし、沖縄をはじめ日本全国から首里城再建に向けて温かい支援が集まっている。与那原の記すように、この思いがあれば首里城はまたきっと甦るに違いない。

2019年は、組踊の初演から300年の記念の年であった。この年、組踊の特別鑑賞会が全国各地で開催されたが、7月28日には宮城県蔵王町の「蔵王町ふるさと文化会館」で「執心鐘入」が上演され、2020年1月26日には宮城県仙台市の「日立システムズホール仙台　シアターホール」で「護佐丸敵討」が上演され、宮城県民としては組踊に触れる実に貴重な機会となったのであった。どちらの公演も会場を満たした方々が沖縄の伝統芸能に触れることができて、大満足の公演となったことは言うまでもない。これを機に、沖縄の誇る伝統芸能や伝統工芸への関心がますます高まっていくことであろう。

最後に今年度の活動について触れておこう。今年度も本学生涯学習講座「知りたいっちゃ沖縄　行きたいっちゃ沖縄」とタイアップして活動してきた。講座では犬飼公之が

「天空のコスモロジー―太陽と月と風」と題して『おもろさうし』を読み解き、岩川亮は「沖縄を外の世界から見る」と題して、世界史的視点のもとに海外からの視点から沖縄に多面的に迫った。また、宇津井孝義は「糸をつむぐ海・（街道）と人びと」と題して、沖縄の糸、染、織りについて語り、栗原健は「沖縄のマジムン（妖怪）伝承」「沖縄における怪談話の世界」と題して沖縄の信仰世界や自然観について講義した。初回を担当した今林は「イントロダクション」と「西表島概観」と題して、今回、研修旅行で訪れる予定であった西表島の歴史や文化について講義した。以上の計5名で10回の講義を行った。

講座終了後の研修旅行では西表島をメインに石垣島、由布島、竹富島を訪ねたが、今回も山里純一氏（琉球大学名誉教授、現名桜大学教授）に一方ならぬお世話をいただいた。山里先生には御多用のところ準備段階からお世話いただいたが、今回のツアーが大成功に終わった背景には山里先生御自身と、山里先生が琉球大学在職中に顧問を務められていた「琉球大学八重山芸能研究会」のネットワークのおかげである。このネットワークの広さと深さにはいつも驚かされるが、今回もそれを実感したツアーとなった。また、西表島では石垣金星氏にもお世話になった。石垣氏には西表島祖納地区に残る史跡等について貴重なお話を伺ったが、天候に恵まれなかったことは返す返すも残念であった。

山里先生をはじめ、御協力いただいた皆さんにこの場を借りて心からの御礼を申し上げたい。ありがとうございました。

さて、冒頭に記した首里城の消失は、火災発生から3ヶ月以上が経過したが、未だに信じられない気持ちであるし、喪失感が募るばかりであることもまた否めない。しかし、前述のとおり、遠い道のりではあろうが、首里城はまた蘇って私たちにその美しい姿を見せてくれるに違いない。